

Hokkaido University News

北大時報

平成24年

2

No. 695 February 2012

本学職員表彰を実施 北海道大学一般入試の志願状況

お知らせ

・過半数代表候補者の決定



1 大学運営を担う組織

— 総長室・本部・機構 —

全学ニュース

- 2 本学職員表彰を実施
- 2 AO入試合格者の発表
- 3 北海道大学一般入試の志願状況
- 4 北大フロンティア基金
- 6 塩野義製薬株式会社 手代木功社長へ感謝状を贈呈
- 6 「若手人材育成シンポジウム “シンフォスター 2012”」の開催
- 7 公立はこだて未来大学と「北海道地域における大学等の知的財産の技術移転に関する協定」締結
- 8 北海道大学総長奨励金受給留学生報告会を実施
- 9 企業研究セミナーを開催

部局ニュース

- 10 低温科学研究所が「ドイツ・マックスプランク陸生微生物学研究所」及び「デンマーク・コペンハーゲン大学ニールスボーア研究所」と部局間交流協定を締結
- 11 韓国・釜慶大学校水産科学大学と水産科学院・水産学部における学生交流に関する覚書の締結
- 11 グローバルCOEプログラム「知の創出を支える次世代IT基盤拠点」, 第5回国際シンポジウム「GCOE-NGIT2012 (知の創出を支える次世代IT)」を開催
- 12 スラブ研究センター国際シンポジウム「近現代帝国の比較」を開催
- 13 スラブ研究センターが公開講演会「大震災と海洋汚染」を開催
- 14 公開シンポジウム「血管を標的とする革新的医薬分子送達法の基盤技術の確立」を開催
- 15 水産科学研究院で平成23年度部局FD研修会(第16回)を開催
- 15 メディア・コミュニケーション研究院でFD講演会「大学で起こるハラスメント～原因と予防方法について～」を開催
- 16 「ビプリオバトル in 北海道大学附属図書館」の開催
- 17 附属図書館で「出向者連絡会」を開催
- 18 真冬の森の宝, 見つけた!
—雨龍研究林で「森のたんけん隊2012冬」を開催—



職員表彰



企業研究セミナー

同窓会との交流

- 19 恵迪寮同窓会「新年寮歌歌始めの会」

諸会議の開催状況 20

学内規程 21

お知らせ

- 21 過半数代表候補者の決定

表敬訪問 22

人事 23

- 24 新任教授紹介

メディア・コミュニケーション研究院
FD講演会

ビプリオバトル in 附属図書館



森のたんけん隊2012冬

恵迪寮同窓会
新年寮歌歌始めの会

表紙：雪景色の古河講堂

裏表紙：北の息吹[®] メアカンキンバイ (*Potentilla miyabei*)

大学運営を担う組織

— 総長室・本部・機構 —

教育研究組織担当理事 ^にった ^たかひこ
新田 孝彦



大学を構成する基本的な組織は、いうまでもなく学部・大学院・研究所等の教育研究組織ですが、とりわけ法人化以降は、総長のリーダーシップのもとでの大学運営が求められており、本学でも全学的な見地からさまざまな業務を担う組織が設置されています。しかし、多くの教職員にとっては、そうした組織はなじみが少なく、また組織の構成自体も複雑であるために、どのような組織によって大学が運営されているのかが十分には理解されていないかも知れません。そこで、総長の大学運営を支える総長室、本部、機構の役割について概略をご紹介します。

重要事項を担う総長室

大学運営に関わる様々な事柄の中に、重点的に力を入れなければならないものがあります。これらを重要事項と特定事項の2種類に分けます。重要事項は中期目標・中期計画や予算編成方針、教育・研究・施設などの全学的な方針などであり、総長室はこれらの事項の企画・立案を行っています。総長室は、企画・経営室、教育改革室、研究戦略室、施設・環境計画室の4室からなります。それぞれ担当理事が室長を務め、役員補佐（教員）と室員（理事・教員・事務局部長）が知恵を出し合って議論しています。企画・立案された事項は、経営協議会、教育研究評議会、もしくは役員会で承認され、総長が決定し、教育研究組織や事務組織等がその業務を担います。総長室のほかに広報室、基金室、評価室の3室が設置されており、総長あるいは担当理事の下で広報や基金に関する企画・立案、または評価業務を行っています。

特定事項を担う本部

一方、特定事項とは、国際戦略や産学連携などに関する事柄であり、これらには本部制をとって対応しています。本部は、企画・立案から業務実施までを一元的に担います。具体的に、国際本部（国際交流・国際戦略・留学生教育）、教育研究支援本部（技術職員の組織化の推進・人材育成）、情報環境推進本部（情報基盤の充実・情報環境の整備）、産学連携本部（産学連携や知的財産の保護・活用）、人材育成本部（若手研究者のキャリア形成支援・女性研究者支援）、サステイナブルキャンパス推進本部（環境配慮型キャンパスの整備）、安全衛生本部（安全衛生・学術研究に係

る安全の推進）、そしてアドミッションセンター（入学者選抜・入試広報）もこれに含まれます。各本部の実質的な責任者はいずれも理事・副学長が務めており、これらの業務は大学の基盤を整備することに役立っています。

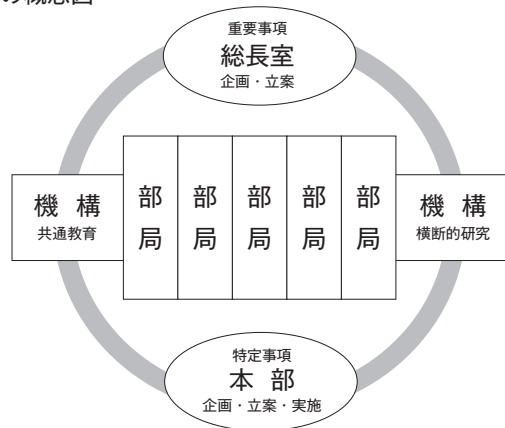
2つの機構

大学の基本的な任務である教育と研究については、各教育研究組織が担っていますが、全学的な教育や、部局横断的な研究推進に関する事項を統括・実施するため、2つの機構が設置されています。「高等教育推進機構」は、主に学部の全学教育と大学院共通授業の企画・立案・実施、高等教育に関する研究などを担当しています。もう一方の「創成研究機構」は、研究戦略に基づく重点的な研究事業の推進・支援や、先端的な科学技術の振興に寄与する人材育成などを担当しています。「機構」は、いわば大学の根幹である教育と研究に関して、部局間の連携の下に業務を遂行する組織であり、機構長にはそれぞれ副学長が任命されています。

おわりに

事柄によっては総長室・本部・機構が連携を図り、企画・立案しなければならないものもあり、その場合、合同でワーキンググループやタスクフォースを設置して対処します。運営組織は教職員の協働がなければ機能しません。今後ともご協力のほどよろしくお願いいたします。

組織の概念図



■全学ニュース

本学職員表彰を実施



被表彰者と佐伯総長ほか列席者

1月26日（木）、総長室において「北海道大学職員表彰」表彰式が行われ、関係者列席のもと、佐伯 浩総長から被表彰者に、賞状（盾）及び記念品（メダル）が授与されました。

この表彰は、職務上顕著な功績等があった方及び職務外において職員の模範として表彰に値する善行を行った方を対象とするものです。

このたび表彰された方々は、超短光パルス発生技術及び計測技術の修得にとどまらず自ら計測装置の作製に精励された工学研究院技術専門職員 中川直也氏、並びに人目につきにくいカウンセリング業務に精励された保健センターカウンセラー 大崎明美氏のお二人で、本学の教育研究支援に貢献されました。

（総務企画部人事課労務管理室）

AO入試合格者の発表

平成24年度AO入試のうち、大学入試センター試験を課す医学部及び工学部の合格者発表が2月7日（火）に行われ、15名が合格しました。

昨年12月6日（火）に合格者発表が行われた理学部、歯学部及び水産学部と合わせ、合格者数は56名となりました。

（学務部入試課）

平成24年度AO入試合格者数等一覧

学部・学科等		募集人員	志願者数	倍率	第1次選考合格者	合格者	
理学部	物理学科	5	6 (3)	1.2	5 (2)	3 (2)	
	化学科	8	13 (5)	1.6	10 (4)	5 (3)	
	生物科学科（生物学専修分野）	5	13 (7)	2.6	8 (6)	3 (2)	
	地球惑星科学科	5	12 (4)	2.4	12 (4)	5 (2)	
医学部	医学系	5	8 (5)	1.6	7 (5)	1 (1)	
	保健学系	看護学専攻	7	22 (18)	3.1	22 (18)	7 (6)
		作業療法学専攻	4	6 (5)	1.5	6 (5)	4 (3)
歯学部		5	10 (4)	2.0	10 (4)	5 (2)	
工学部応用理工系 （応用マテリアル工学コース）		4	10 (4)	2.5	8 (4)	3 (1)	
水産学部		20	45 (10)	2.3	29 (6)	20 (4)	
計		68	145 (65)	2.1	117 (58)	56 (26)	

※（ ）内は、道内高校出身者で内数

北海道大学一般入試の志願状況

平成24年度の本学一般入試の志願者は、前期日程5,710名、後期日程4,662名、合計10,372名となり、昨年度と比較すると382名増加し、倍率は4.3倍となりました。

入学試験日は、前期日程が2月25日（土）・26日（日）、後期日程が3月12日（月）となっています。

各学部・学科等の志願者数は、次のとおりです。

(学務部入試課)

平成24年度北海道大学一般入試志願者数

一般入試

日程	学部・学科等	募集人員	志願者数	倍率	第一段階選抜 予告倍率	前年度 志願者数	前年度倍率			
前期日程	総合入試	文系	100	332	3.3	4.0	463	4.6		
		理系	数学重点選抜群	130	423	3.3	4.0	319	2.5	
			物理重点選抜群	235	643	2.7	4.0	752	3.2	
			化学重点選抜群	235	628	2.7	4.0	698	3.0	
			生物重点選抜群	177	432	2.4	4.0	459	2.6	
			総合科学選抜群	250	729	2.9	4.0	602	2.4	
			計	1,027	2,855	2.8		2,830	2.8	
	学部別入試	文学部	118	400	3.4	4.0	342	2.9		
		教育学部	20	87	4.4	4.0	64	3.2		
		法学部	140	318	2.3	4.0	338	2.4		
		経済学部	140	428	3.1	4.0	449	3.2		
		医学部	医学系	97	332	3.4	3.5	281	2.9	
			保健学系	看護学専攻	60	135	2.3	5.0	149	2.5
				放射線技術科学専攻	28	87	3.1	5.0	77	2.8
				検査技術科学専攻	28	90	3.2	5.0	96	3.4
				理学療法学専攻	13	45	3.5	5.0	38	2.9
				作業療法学専攻	13	51	3.9	5.0	29	2.2
小計	142	408	2.9		389	2.7				
計	239	740	3.1		670	2.8				
歯学部	30	105	3.5	6.0	107	3.6				
獣医学部	20	115	5.8	6.0	103	5.2				
水産学部	105	330	3.1	4.0	370	3.5				
合計		1,939	5,710	2.9		5,736	3.0			
後期日程	文学部	37	346	9.4	6.0	318	8.6			
	教育学部	10	114	11.4	10.0	78	7.8			
	法学部	40	350	8.8	6.0	391	9.8			
	経済学部	20	243	12.2	10.0	235	11.8			
	理学部	数学科	13	131	10.1	6.0	89	6.8		
		物理学科	5	102	20.4	6.0	100	20.0		
		化学科	15	148	9.9	6.0	130	8.7		
		生物科学科 生物学専修分野	5	76	15.2	6.0	78	15.6		
		生物科学科 高分子機能学専修分野	5	59	11.8	6.0	51	10.2		
		地球惑星科学科	5	86	17.2	6.0	61	12.2		
		計	48	602	12.5		509	10.6		
	医学部	保健学系	放射線技術科学専攻	7	73	10.4	6.0	62	8.9	
			検査技術科学専攻	7	105	15.0	6.0	95	13.6	
			理学療法学専攻	4	42	10.5	6.0	49	12.3	
	小計	18	220	12.2		206	11.4			
	歯学部	8	83	10.4	6.0	115	14.4			
	薬学部	24	303	12.6	6.0	252	10.5			
	工学部	応用理工系	34	391	11.5		330	9.7		
		情報エレクトロニクス系	38	306	8.1		286	7.5		
		機械知能工学系	30	267	8.9		240	8.0		
		環境社会工学系	53	401	7.6		396	7.5		
		計	155	1,365	8.8		1,252	8.1		
	農学部	53	526	9.9	6.0	418	7.9			
獣医学部	15	123	8.2	6.0	114	7.6				
水産学部	50	387	7.7	6.0	366	7.3				
合計		478	4,662	9.8		4,254	8.9			
総計		2,417	10,372	4.3		9,990	4.1			

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っていくこととしています。

期限を付さない、息の長い募金活動を行うこととしていますが、平成27年度末までに募金目標額50億円の半分程度の募金額を目指しています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報	12,363件 2,290,682,526円
基金累計額（1月31日現在）	教職員の寄附率 26.8%（1,051件／3,917人）

1月のご寄附状況

法人等13社、個人112名の方々から9,732,000円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいているの方々のご芳名、総合博物館への銘板の掲示、感謝状の贈呈について掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

財団法人愛育病院、有限会社入江どうぶつ病院、株式会社ウチダシステムソリューション、株式会社内田洋行、NTT東日本札幌病院、北商事有限会社、医療法人溪仁会、医療法人溪仁会 手稲溪仁会病院、北海道軌道施設工業株式会社、社会福祉法人北海道社会事業協会、社会福祉法人北海道社会事業協会 岩内病院、社会福祉法人北海道社会事業協会 小樽病院、社会福祉法人北海道社会事業協会 余市病院

寄附者ご芳名（個人）

厚谷 襄兒	荒木 健治	有沢 広彦	伊藤豊志雄	上田 敦	大場 英之	大畑 昇	小内 透
小原 寿幸	小原 大和	鍵山 直子	角田 敏男	籠田 勝基	神原 勝	木村 和弘	小嶋 一夫
小嶋 國利	後藤 公希	齊木 敏文	齋藤 敏之	三田久美子	柴原 壽行	杉田 福夫	瀬名波栄潤
高橋 光彦	高橋 庸夫	滝口 満喜	田島 朋子	田中 讓	土家 琢磨	坪田 敏男	出光 正敏
寺澤 睦	所 伸一	富岡 義雄	富永 博夫	豊田 威信	西谷内力世	野坂 政司	長谷川高正
八戸 裕	早川 邦雄	早坂 昭博	日野 恵介	平野 聡	福士 宗光	伏見 公志	古市隆三郎
前出 吉光	松井 博和	松澤 重治	松島 興志	宮下 正洋	宮永 喜一	宮本 太郎	武藤 俊一
森口 良三	山本 靖典	吉田 広志	芳村 仁	脇 研二			

銘板の掲示 (20万円以上のご寄附)**(法人等)**

財団法人愛育病院, N T T東日本札幌病院, 医療法人溪仁会, 医療法人溪仁会 手稲溪仁会病院,
 社会福祉法人北海道社会事業協会, 社会福祉法人北海道社会事業協会 岩内病院,
 社会福祉法人北海道社会事業協会 小樽病院, 社会福祉法人北海道社会事業協会 余市病院

(個人)

滝口 満喜, 松井 博和

感謝状の贈呈

戸田建設株式会社札幌支店様
(平成24年2月9日)



斗南病院様 (平成24年2月20日)

ご寄附のお申し込み方法**① 給与からの引き落とし**

申込書は, 本学ホームページの「学内限定情報・システム」からダウンロードし, ご記入の上基金事務室に提出してください。

**② 郵便局または銀行への振り込み**

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお渡します。

③ 現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて, 事務局財務部経理課収入担当にご持参ください。申込書は, 本学ホームページから上記①の要領でダウンロードしてご記入いただくか, 各部局事務担当及び事務局財務部経理課収入担当にご用意していますので, ご利用ください。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 基金事務室 (事務局・学内電話 2017)

(総務企画部広報課)

塩野義製薬株式会社 手代木功社長へ感謝状を贈呈



佐伯総長と手代木社長を囲んで
左から、川端先端生命科学研究院長、上田理事・副学長、武本シオノギ創薬イノベーションセンター長、
高山未来創薬・医療イノベーション推進室長

1月19日(木)、本学総長室において、佐伯 浩総長から塩野義製薬株式会社手代木功代表取締役社長に感謝状が贈呈されました。

塩野義製薬株式会社は、平成18年より、本学が中心となって推進している産学連携の大型事業「未来創薬・医療イノベーション拠点形成」の協働企業

として共に研究を行ってきました。同社が平成20年に北キャンパス内に設置した研究施設「シオノギ創薬イノベーションセンター」は、本事業の中核的な産学連携拠点として活動を展開しています。

本感謝状は、このような本学の推進する産学連携事業に対する多大な貢献



感謝状を手に、佐伯総長と手代木社長(右)

と、大学院共通授業科目である「シオノギ未来創薬セミナー・創薬科学特別講義」等を通じ、本学の大学院教育の充実に対し多大なるご尽力をいただいたことで、本学における生命科学領域における人材の育成に極めて大きな貢献をされたことによるものです。

当日は、佐伯総長、手代木代表取締役社長を囲んで、上田一郎理事・副学長、川端和重先端生命科学研究院長、武本 浩シオノギ創薬イノベーションセンター長、高山 大未来創薬・医療イノベーション推進室長も同席し、和やかに歓談されました。

(研究推進部研究企画・推進課)

「若手人材育成シンポジウム “シンフォスター 2012”」の開催

1月26日(木)、学術交流会館において「若手人材育成シンポジウム “シンフォスター2012”」を開催しました。

本シンポジウムは、本学において実施している人材育成の取組を集めて、それらの事業実施者間の更なる理解と連携を深め、あわせて学内外に対して本学の人材育成活動をアピールすることを目的として、平成20年度から開催し、今回で4回目の開催となりました。

シンポジウムの第1部では、文部科学省科学技術・学術政策局基盤政策課長 板倉周一郎氏、ソニー株式会社業務執行役員 先端マテリアル研究所

長 熊谷 修氏からの基調講演や「北大におけるテニユアトラック制度の現状と将来について」と題したパネルディスカッションが行われ、第2部で



第1部：基調講演の様子
(文部科学省 板倉基盤政策課長)

は、本学の魅力ある大学教育の取組紹介、第3部では、交流会も兼ねた本学で実施している人材育成事業に関するポスターセッションが行われ、全体で



第1部：パネルディスカッションの様子

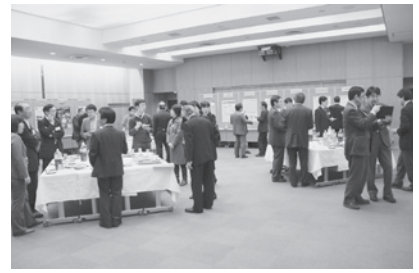
8機関13名の学外参加者を含めた128名の参加がありました。

第3部のポスターセッションでは、本学で実施している人材育成に関する約30事業のポスター出展者からのショートトーク発表をはじめ、参加者間で活発な意見交換や情報共有が行われるなど、大盛況のうちに終了し、本学独自の一貫した人材育成システムの構築に大きく寄与するものとなりました。

(研究推進部研究企画・推進課)



第2部：魅力ある大学教育の取組紹介
(理学研究院 小野寺彰教授)



第3部：ポスターセッションの様子

公立はこだて未来大学と「北海道地域における大学等の知的財産の技術移転に関する協定」締結



締結式で握手を交わす佐伯総長（左）と中島理事長

2月1日（水）に本学は、公立はこだて未来大学と「北海道地域における大学等の知的財産の技術移転に関する協定」を締結しました。このような協定は、既に北海道内の3大学（北見工業大学、酪農学園大学、室蘭工業大学）と締結していますが、函館地域は本学水産科学研究所の本拠地でもあり、この協定が、函館地区における産学連携の推進に寄与するものと期待されます。

本学事務局で行われた締結式では、佐伯 浩総長と中島秀之理事長の挨拶が行われ、本学 荒磯恒久産学連携副本部長より協定の概要についての説明

が行われた後、関係者が見守る中、佐伯総長と中島理事長による協定書への署名がなされました。

本学と公立はこだて未来大学は、函館市と連携しながら「新水産・海洋都市はこだてを支える人材養成講座」の運営を協力して行うなど、これまでも連携した活動を行ってきましたが、本協定の締結を機に、知的財産を基にした融合研究をはじめ、様々な連携活動を展開していきます。

(産学連携本部)



協定書に署名を行う佐伯総長と中島理事長

北海道大学総長奨励金受給留学生報告会を実施

1月27日（金）、国際本部大講義室において、北海道大学総長奨励金受給留学生報告会を開催しました。

北海道大学総長奨励金は、国際本部に係る「中期目標達成強化経費」による事業のひとつで、本学大学院に優秀な私費外国人留学生を受け入れるため、本学の国際交流協定校の学生及び卒業生のうち、学業成績が極めて優秀で、かつ、本学の教育研究等及び日本文化等に大きな関心を持つ者に対し奨学金を給付する制度です。平成18年度から受入れを開始しており、現在は13名の留学生が受給しています。

この報告会は、国際本部が奨学金給付後のフォローアップとして実施するもので、留学生とその指導教員等が出

席しました。今回発表したのは昨年10月に入学した6名を含む12名です（内1名は母国帰国中のため欠席）。

報告会では、留学生からの本学での研究の進捗状況や北海道での生活についての報告と、指導教員等からの補足説明を交互に行いました。途中、出席者からの質問もあり、学生は真摯に答えていました。各々の報告時間は短かったものの、留学生たちがそれぞれの研究分野で先端的・独創的な研究を行っており、成果も十分に上がっていることをうかがい知ることができました。難易度が高いテーマにチャレンジしている学生や、フィールドワークに積極的に参加している学生、また、学会や学業外の活動等に熱心に取り組ん

でいる学生もあり、指導教員からも非常に期待しているとのコメントがありました。流暢な日本語で発表する学生も多く、指導教員や研究室のメンバーに親しみ、充実した学生生活を送っている様子が生き生きと伝わってきました。

最後に、本堂武夫国際本部長より、「この報告会で、奨学金を受給している皆さんは、非常に積極的に研究に臨んでいることがわかった。今後もそれぞれの分野でのますますの活躍を期待している」との言葉がありました。

（国際本部国際支援課）



報告する留学生



質疑応答風景



挨拶する本堂国際本部長

企業研究セミナーを開催



説明会で企業からの説明を熱心に聞く学生

キャリアセンターでは、昨年の12月1日（木）～22日（木）及び1月10日（火）～17日（火）のうち24日間にわたり、「平成23年度北海道大学企業研究セミナー」をクラーク会館において開催しました。

このセミナーは、これから就職活動をはじめの学生の地理的ハンディキャップを少なくした上で、学生が主体的に企業・業界研究を行い、「就職活動へ向けての礎をつくる」ことができるよう、北海道大学連合同窓会と本学とが協力して実施している就職活動支援イベントです。

本年度は479社（昨年度：427社）の企業が参加し、延べ33,985名（昨年度：23,529名）の学生が、企業の人事・採用担当者からの、企業や業界に係る説明に熱心に耳を傾け、積極的に質問等を行っていました。

また、留学生の採用を予定している企業による「留学生相談コーナー」には、108社が参加し、延べ310名の学生が利用しました。

セミナー終了後には、企業の人事・採用担当者と学生との交流の場として「情報交換会」を設けました。12月13日（火）には佐伯 浩総長も参加し、人事・採用担当者と学生の輪に加わり、打ち解けた雰囲気の中で懇談しました。

このほか、セミナー期間中に、「グループディスカッション講座」及び「公開模擬面接会」を特別企画として実施しました。特に「公開模擬面接会」では、企業の人事・採用担当から、「話の展開に論理性がある」「自分の言葉で表現できている」等評価される一方で、「面接官の目を見て話すように」「志望動機についてよく考えた方がよい」等のアドバイスがあり、参加学生はこれから本格化する就職活動での課題をはっきりさせることができました。

本セミナーは、各企業及び諸団体等のご協力を得て開催されたものです。関係の皆様には感謝申し上げます。

（学務部キャリアセンター）



留学生相談コーナーで企業の人事・採用担当者へ質問する留学生



情報交換会で懇談する佐伯総長



「グループディスカッション講座」での討議風景



「公開模擬面接会」で面接を受ける学生と聴講学生

■ 部局ニュース

低温科学研究所が「ドイツ・マックスプランク陸生微生物学研究所」及び「デンマーク・コペンハーゲン大学 ニールスポーア研究所」と部局間交流協定を締結



調印式における関係者記念写真
(マックスプランク陸生微生物学研究所)

低温科学研究所では、1月20日(金)にマックスプランク陸生微生物学研究所、25日(水)にニールスポーア研究所と部局間交流協定を締結しました。

マックスプランク陸生微生物学研究所は微生物の代謝多様性や環境応答等のメカニズム解明に重点を置いた研究機関であり、最近ではメタンを分解する微生物酵素の立体構造を、世界にさきがけ画期的なX線結晶解析により解明した最先端の研究所です。マックスプランク陸生微生物学研究所で開催された調印式においては、本学低温科学研究所の古川義純所長から「相互の研究開発能力及び人材を活かして総合力を発揮し、国際的に連携することにより、双方の研究所の交流を促進し、研究と教育の発展に重要な役割を果たしたい」と抱負を述べました。マックスプランク陸生微生物学研究所のRegine Kahmann所長からは「締結により、両研究所がより一層協力し合い、寒冷圏科学の発展に寄与したい」と発言がありました。

また、コペンハーゲン大学にあるニールスポーア研究所は主に天文学、

地球物理学、素粒子物理学、量子力学等に重点を置いており、特に当該研究所に設置されている氷及び気候研究センター(Centre for Ice and Climate)は、気候及び極域氷床コア解析による古環境復元等の研究を国際的にリードしている研究所です。本研究所からは長期に助教を派遣する等の交流があり、古川所長が1月23日(月)に研究所を訪問し、この度の協定締結に結びついた次第です。当日は所長代理としてDorthe Dahl-Jensenセンター長と会談し、お互いに交流を深め、今後の研究等について積極的に推進していく旨固く約束を交わし、25日(水)の協定締結に至りました。

なお、今回の協定締結により、マックスプランク陸生微生物学研究所から嶋盛吾生化学グループリーダーを本研究所客員教授として招へいすることが決定するとともに、今後の教員・大学院生の派遣や受入、共同研究の実施等、積極的な交流連携が期待されます。

(低温科学研究所)



協定書を取り交わす Regine Kahmann
マックスプランク陸生微生物学研究所長と
古川所長(右)



交流連携の約束を交わす Dorthe Dahl-Jensen
氷及び気候研究センター長と古川所長(右)

韓国・釜慶大学校水産科学大学と水産科学院・水産学部における学生交流に関する覚書の締結

このたび、釜慶大学校水産科学大学と水産科学院・水産学部との間で、学生交流に関する覚書を締結することになり、それを記念して昨年の12月26日（月）に、釜慶大学校水産科学大学において、両部局の教育交流に関するミニシンポジウムと覚書締結記念式典が開かれました。

シンポジウムでは、互いの部局における教育研究活動と国際協力活動の概要について解説が行われ、本学からは、今年初めて開催した水産科学サマーコースを紹介しました。その後、両部局における教育交流を具体化するための話し合いを行い、来年度には、数名の教員交流を行うこと、両国の最先端の水産科学について紹介し合う授業交換を実施することが確認されました。

記念式典では和やかな雰囲気の中、李 春雨釜慶大学校水産科学大学長と、嵯峨直恆水産科学院長・水産学部長が覚書に署名を行うとともに、締結を記念した記念品の交換を行いました。

（水産科学院・水産科学研究院・水産学部）



参加関係者による記念撮影



サマーコースの紹介



覚書の取交し（左：嵯峨先生、右：李先生）

グローバルCOEプログラム「知の創出を支える次世代IT基盤拠点」、第5回国際シンポジウム「GCOE-NGIT2012（知の創出を支える次世代IT）」を開催

情報科学研究科では1月16日（月）～18日（水）の3日間、学术交流会館において、グローバルCOEプログラム「知の創出を支える次世代IT基盤拠点」（拠点リーダー：教授 有村博紀）主催による、第5回国際シンポジウム「GCOE-NGIT2012（知の創出を支える次世代IT）」を開催しました。

シンポジウムは、Costantino Thanos 教授（イタリア・ISTI-CNR）による基調講演から始まり、最終年度である今年度は、拠点メンバーが成果・進捗状況の報告を行いました。特に、本拠点形成プログラムの大きな柱のひとつである異分野共同研究については特別セッションを組み、3つのプロジェクト（ROV^{*1}新種探索プロジェクト、ナノ知識探索プロジェクト、FPGA^{*2}高速情報探索プロジェクト）についての発表を行いました。さらに、本プロ

グラムのもとで研究する学生・PDによる100件を超えるポスターセッションを行い、特に優秀な成果を上げた学生による学生選抜セッションでは、活発な議論が繰り広げられました。

本シンポジウムは企業及び学外からの参加者も含め、延べ360名以上の参加者を迎えて、活気あふれる国際シンポジウムとなりました。関連して、シンポジウム前に、本プログラム主催のGCOEワークショップを、1月12日（木）～14日（土）の3日間、知識メディア・ラボラトリーにおいて開催しました。

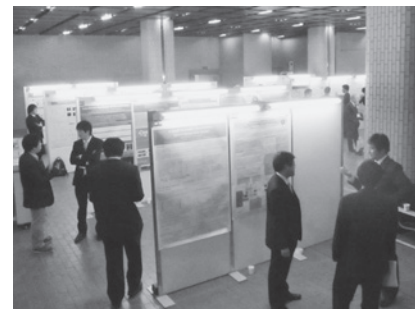
^{*1} Remotely Operated Vehicle
有索無人潜水機

^{*2} Field Programmable Gate Array
書き換え可能な論理回路（ゲート）素子

（情報科学研究科）



基調講演の様子



ポスターセッションの様子

スラブ研究センター国際シンポジウム「近現代帝国の比較」を開催



討論の様子

1月19日（木）・20日（金）に、スラブ研究センター冬期シンポジウムを兼ねた新学術領域研究第6回国際シンポジウムComparing Modern Empires: Imperial Rule and Decolonization in the Changing World Order（近現代帝国の比較：世界秩序変動の中での帝国統治と脱植民地化）が、当センター大会議室で開かれました。

これは、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」（代表：教授 田畑伸一郎）の第4班（帝国論／代表：教授 宇山智彦）が企画したものです。本領域研究はロシア、中国、インドを主な対象としたものではありませんが、帝国比較のためにはさまざまな帝国を視野に入れる必要があること、帝国は帝国間及び国民国家や小地域との関係性の中で機能してきたことから、今回のシンポジウムでは、日本、アメリカ、オスマン帝国、イラン、中央アジアに関する報告も入れました。

1日目は、ジェーン・バーバンク氏（ニューヨーク大学）による基調講演「帝国と変容：差異の政治」に始まり、第1セッション「帝国統治の構造と技術」、第2セッション「帝国と他者の相互関係と相互認識」で、帝国史に関するさまざまな議論を行いました。特に議論の焦点になったのは、帝国中央とは異質な社会を統治する際の仲介者・協力者の存在であり、また帝国の

保守主義と近代化の関係も話題になりました。

2日目は主に20世紀前半に諸帝国が崩壊した後の問題を取り上げて、第3セッション「帝国崩壊と国家再編：遺産と変化」、第4セッション「脱植民地化の地域的・国際的意義」、第5セッション「新しい帝国？ 米国と中国」を開き、総括討論も行いました。戦後インドの経済発展が可能になったのが、イギリス帝国の遺産や外国の援助を巧みに活用したためか、帝国支配の悪影響を克服したためかについては、相異なる見方が披露されました。アメリカの帝国性や中国の再帝国化の可能性についてもさまざまな議論が出ました。

全体として、多様な話題について非常に活発な議論が繰り広げられ、帝国研究の世界的な発展と、その今日的な意義を、凝縮した形で感じ取ることができました。今回は、企画を担当した新学術領域研究第4班の班員がなるべく多く報告するという方針をとり、15本の報告のうち6本が日本人によるものでしたが、それらの水準が高かったという評価を外国人ゲストの方々からいただいたのも嬉しいことでした。また、前日の1月18日（水）には、プレシンポジウム・セミナーとして、当センター外国人研究員3人の報告会を開き、外国人研究員とシンポジウム参加者の交流を深めることもできました。

（スラブ研究センター）



主な参加者たち

スラブ研究センターが公開講演会「大震災と海洋汚染」を開催



放射能海洋汚染について説明する池田名誉教授

1月14日（土）に新札幌サンピアザ劇場にて公開講演会「大震災と海洋汚染」（実施責任者：教授 家田 修）を開催しました。この講演会では福島第1原子力発電所事故にともなう海洋汚染問題を取り上げ、本学の名誉教授である元地球環境科学研究院長の池田元美氏を講師にお招きしました。池田名誉教授からは事前に講演の趣旨が次のように伝えられました。

「東日本大震災に海洋科学専門家はどう関わろうとするのか。日本海洋学会は、大震災によって起こされた海洋放射能汚染の解明と対処に向けて、なるべく多くの人々が納得できるデータと解釈を提示し、何を選択するのか市民が決められるよう活動している。会場では皆さんにそれを目の当たりにしていただくつもりである。」

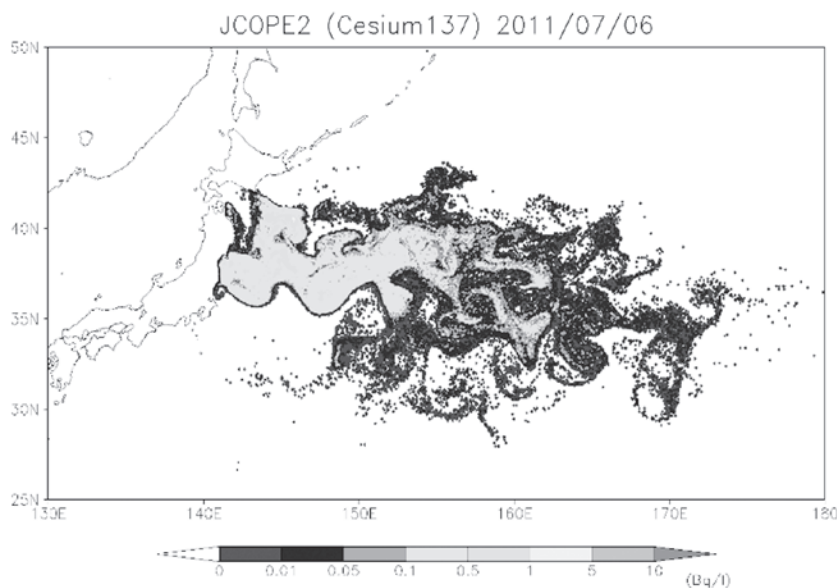
実際、講演では太平洋の複雑な海流がどのように放射能を広い海域に拡散させているのか、手に取るように分かりやすく説明されました。特に動画を使った拡散モデルは参加者の印象に強く残ったようです。講演後の質疑応答は時間を超過して行なわれ、その中には「池田先生ご自身はお魚をどう召し上がっていらっしゃるのでしょうか」という日常生活に係わる切実な質問もありました。120名を超える参加者があり、会場は満員状態でした。市民は日々の問題として放射能汚染を受け止め、大学に最新の知見や正確な情報を期待し

ていることを実感しました。

今回の講演会は、スラブ研究センターの家田研究室が中心になって昨年からはじめた「一緒に考えよう講座」という連続公開講座の第3回でした。講座を始めた背景には、25年前のチェルノブイリ事故があります。この大災害はスラブ地域で起こりましたが、残念なことに25年の経験と教訓はこれまで十分に生かされてきたとは言えません。しかし、この問題は「地域」の問題として受け止める必要があると感じています。また、他方では市民の大学に対する期待（あるいは、何をしているのかという厳しい批判）に応え

るという動機もありました。運よく、村田学術振興財団に申請した「突発的な大規模環境汚染事故への国境を越えた社会防災的対応」という共同研究助成が採択されて予算的な裏付けもでき、市民団体の協力も得られ、講座の開始に至りました。4月にはチェルノブイリの現地から専門家を呼び、ミニ国際シンポジウムを開催予定です。今回の講演会の詳細も含め、詳しくは<http://src-hokudai-ac.jp/ieda>をご覧ください。

（スラブ研究センター）



講演会で紹介された海洋汚染モデル

公開シンポジウム「血管を標的とする革新的医薬分子送達法の基盤技術の確立」を開催

1月12日（木）、学术交流会館において、公開シンポジウム「血管を標的とする革新的医薬分子送達法の基盤技術の確立」を開催しました。

本シンポジウムは、学内の部局横断型連携プロジェクト（運営費交付金特別経費：平成21年～25年）の中間成果を発表すると共に、最終目標である「血管を標的とした革新的創薬創出」を目指した今後の取り組みについて紹介するもので、学内外から219名もの方々にご来場いただき、盛会裡に終わることができました。

最初に佐伯 浩総長から、運営費交付金特別経費プロジェクトとして行われている本研究プロジェクトの趣旨説明が行われ、文部科学省高等教育局国立大学法人支援課の鎌塚 聡課長補佐から祝辞をいただきました。また、上田一郎理事・副学長からは、平成21年4月から開始した本研究プロジェクトの2年半の具体的研究成果について総

括がありました。

次に、東北大学加齢医学研究所 佐藤靖史教授と東京大学大学院薬学系研究科 杉山雄一教授による、最先端の研究成果についての特別講演が行われました。また、本プロジェクトに非常に高い評価をいただきました。

懇親会においても多くの方々から貴重な激励のお言葉を頂戴し、プロジェクト後半戦へ向けて大きな励みとなりました。

本シンポジウムの開催を通じて、新たな交流の芽が生まれ、革新的な医療・創薬の実現に向けて、これまで以上に異分野との連携、交流を積極的に推進していく機会となりました。

なお、シンポジウムの詳細は次のホームページにも掲載しています。

(<http://www.pharm.hokudai.ac.jp/mirai/>)

(薬学研究院・薬学部、歯学研究科・歯学部)



開会の辞を述べる鈴木邦明歯学研究科長



研究プロジェクトについて説明する佐伯総長



祝辞を述べる文部科学省 鎌塚課長補佐



研究成果について総括する上田理事・副学長



佐藤教授による特別講演
(東北大学加齢医学研究所)



杉山教授による特別講演
(東京大学大学院薬学系研究科)



会場の様子

水産科学研究院で平成23年度部局FD研修会（第16回）を開催

水産科学研究院では1月11日（水）に部局ファカルティ・ディベロップメント（FD）研修会を函館キャンパスにおいて開催し、43名の参加がありました。「平成23年度入学生以降の札幌キャンパスでの“出張”教育」というタイトルで講演と討論形式の研修を行いました。水産学部では、平成23年度入学生より札幌から函館へのキャンパス移行時期を3年次1学期からと半年遅らせることにしました。そのような理由から2年次の学部専門科目を札幌キャンパスで実施することになり、多くの教員は札幌へ“出張”して授業を

行うこととなります。

講演では、(I)カリキュラムの概観、(II)今年度1年生の就学状況や高等教育推進機構で講義を行う上で必要な諸事項、(III)遠隔地キャンパスでの講義経験のある先生の所感、の話がありました。

講演の後には、「遠隔地キャンパスでの開講形態の違いによる問題点の抽出とその解決法」というグループ討論を実施しました。来年度以降の学部2年生に対する開講形態である、(A)毎週開講、2コマ連続授業、担当教員は複数、(B)隔週開講、2コマ連続

授業、担当教員は1人、(C)隔週開講、2コマ連続授業、担当教員は複数、というグループに分かれて、通常の開講形態である「毎週開講、1コマ授業」との比較により問題点を抽出して、その解決法の提案を行いました。

本研修を通して、出張授業を行う教員間で水産学部固有の問題である遠隔地キャンパスでの授業実施に関連する問題点と、それらを解決するためのアイデア等について、共通認識を持つことができました。

(水産科学院・水産科学研究院・水産学部)

メディア・コミュニケーション研究院でFD講演会「大学で起こるハラスメント～原因と予防方法について～」を開催



講演会の様子

メディア・コミュニケーション研究院では、1月25日（水）、教員を対象としたファカルティ・ディベロップメント（FD）講演会「大学で起こるハラスメント～原因と予防方法について～」を、メディア・コミュニケーション研究院棟105室において開催しました。

この講演会では、近年多様化してい

る様々なハラスメントの様態及びハラスメントの原因となりうる行動を体系的に学ぶことにより、増加傾向にあるハラスメントによる被害を未然に防ぐことを目的として開催されました。講師には、帯広畜産大学保健管理センター所属のカウンセラー・臨床心理士である増田由依氏をお招きし、大学という組織内で起こりうるハラスメント

について、「ハラスメントとは」「ハラスメントの種類・具体的内容」「ハラスメント被害への対応」「ハラスメントの予防」の4つのプログラムに基づきご講演いただきました。

原因となり得る具体的な行動の例示により、ハラスメントが大学という組織の構成員である教職員間、学生間、ひいては教職員と学生間に身近に起こりうる問題であること、ハラスメントの相談を受けた側の対応により2次被害をもたらしてしまう可能性があること、ハラスメントを防ぐには個々人の意識だけでなく組織としての環境作りが必要であるということを改めて学びました。

講演後の質疑応答では、参加した教員26名の中から多くの質問・意見がだされ、参加者の本講演会への関心の高さ、ハラスメントに対する問題意識の高さがうかがえました。

(国際広報メディア・観光学院、
メディア・コミュニケーション研究院)

「ビブリオバトル in 北海道大学附属図書館」の開催



本の紹介をする出場者と発表を聞く聴衆



司会をする企画発案者の
公共政策大学院2年 岡本陽平さん

1月20日(金)、附属図書館本館にて、ビブリオバトルが開催されました。

ビブリオバトルとは、出場者がひとりずつ自分の好きな本を紹介して、聴衆が最も読みたいと思った本に投票し、チャンプ本を決める書評合戦のことです。

今回の本学での開催は、学生が自発的に企画を持ち込み、図書館が支援する形で実現しました。

当日、会場となったラウンジには、30名を超える聴衆が集まり、本学の学部生・大学院生からなる5人の出場者の発表を聞きました。また、発表後に

は積極的なディスカッションが行われ、聴衆の関心の高さがうかがえました。チャンプ本に選ばれたのは、文学研究科博士課程の北郷 彩さんが紹介した、アラン・ド・ボトン著「小説恋愛をめぐる24の省察」(白水社、1998)でした。

イベント終了後に回収したアンケートによると、ビブリオバトルの存在を知らなかった人も全員「面白かった」と回答し、有意義なイベントであったことがうかがえます。また、聴衆の中には次があるなら自分も出場したいと答える人も多く、継続的な開催が望ま

れていることがわかりました。

学生の発案により、図書館と学生が連携して企画を実行するのは今回が初めてのことです。今後、学生との協働を進めていく際に、学生からの企画を図書館がどのように支援し実現していくか、今回のビブリオバトルはこれからの方向性を示してくれました。出場者、聴衆のみならず、図書館としても大変有意義な会でした。

(附属図書館)

ビブリオバトルで紹介された本 (発表順)

- 「論理パラドクス：論証力を磨く99問」 三浦俊彦 二見書房 (2002)
- 「新・物理入門」 山本義隆 (駿台受験シリーズ) 駿台文庫 (2004)
- 「小説恋愛をめぐる24の省察」 アラン・ド・ボトン著；畔柳和代訳 白水社 (1998)
- 「恥知らずのパープルヘイズ：ジョジョの奇妙な冒険より」 上遠野浩平、荒木飛呂彦 集英社 (2011)
- 「あなたの話はなぜ「通じない」のか」 山田ズーニー 筑摩書房 (2006)

附属図書館で「出向者連絡会」を開催



鈴木利用支援課長の案内により、図書館内を見学する出向者

1月27日（金）、出向者連絡会を附属図書館第1会議室において開催し、道内国立大学等へ出向中の本学図書系事務職員4名が参加しました。

この連絡会は、出向者に対し、出向期間中の北海道大学、及び附属図書館の状況についてお知らせするとともに、出向者の近況確認を行うことを目的として毎年実施しています。

最初に、出向者は、鈴木宏子利用支援課長の案内により、再生事業を進め大きく変貌しつつある附属図書館本館の見学を行い、昨年7月にオープンした新棟、改修済みの既存棟及び自動化書庫の運用状況について説明を受けました。次いで蔵野由美子事務部長、杉田福夫管理課長、山本和雄学術システ

ム課長、鈴木利用支援課長が附属図書館本館、北図書館及び各部局図書室における今年度の事業内容や新たな試みについて説明を行い、最後に、蔵野事務部長、杉田管理課長が出向者との個人面談を行いました。

附属図書館等の状況説明の際には質疑応答も行われ、事業計画等に関し出向者から熱心な質問を受けました。参加した出向者は附属図書館、各部局図書室の最新の状況について知識を得たほか、同僚との久しぶりの再会により旧交を温めるなど、有意義な会となりました。

（附属図書館）



自動化書庫説明の様子



説明を聞く出向者

真冬の森の宝，見つけた！

— 雨龍研究林で「森のたんけん隊2012冬」を開催 —

北方生物圏フィールド科学センターでは、小学生を対象とした「森のたんけん隊2012冬」を1月12日（木）・13日（金）に雨龍研究林（雨竜郡幌加内町母子里）で開催しました。

森のたんけん隊は、地元の名寄市北国博物館ならびに幌加内町教育委員会と共同で開催している1泊2日の宿泊体験型野外教育プログラムで、冬休み中の子供たちに研究林のフィールドや施設を開放し、楽しく遊びながら自然の営みや森と人間とのかかわりを学ぶことによって、健やかで個性豊かな人格形成と地域交流を促進するための地域連携社会教育事業です。今年度は日本学術振興会の「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」の採択事業として実施しました。今年の森のたんけん隊には、名寄市と幌加内町のほか、札幌市や下川町などから総勢33名の元気な小学生が集まり、本学の大学院生たちがボランティアとして運営をサポートしてくれました。

初日は厳しい寒さにも負けず、初めてカンジキをはいたとは思えないほど元気いっぱい雪の上を駆け回り、森の中に取り付けられたクイズを解きながら樹木の名前や動物の痕跡を調べたほか、方位磁石の使い方や雪の温度の計測、さらには木の肌に触れながらその太さや高さを測りました。



カンジキをはいて森の中へ
森の不思議が見つかるかな？



さまざまな道具を使って樹木の身体測定に挑戦

休憩の後は、大きな焚き火で暖をとりながら、イグルーとスノーランタン作りに挑みました。イグルー作りでは、雪のブロックを運ぶ係、のこぎりでブロックの形を整える係、それを積み上げる係など、作業を分担し、協力して作りしました。また思い思いの形のスノーランタン作りでは、出来上がったランタンにキャンドルを灯して幻想的な光の世界を楽しみました。



雪のブロックを削り、思い思いの
スノーランタンで幻想的な光の世界を楽しむ

夕食後はペットボトルを使ったアイスクリーム作りに挑戦しました。チョコレート、抹茶、ジャムなど14種類ものメニューの中から何を選ぶかあれこれ迷いましたが、お風呂上りに食べたアイスはとてもおいしく、思わず笑顔がこぼれました。



世界にひとつだけの
オリジナルアイスクリーム作り

2日目は雪上車に乗って森の奥地へ移動し、前日に学んださまざまな森の情報を思い出しながら、方位磁石や巻尺などの7つ道具を使い、巻物の指示を読み解きながら雪の中に埋められた宝箱を探しました。深い雪の中から無事に宝箱を掘り当てた瞬間には、森の中に歓声がこだましました。お昼は雪原でバーベキューを堪能した後、スノーモービルに乗って真っ白な雪原を駆け巡りました。最後に、「森のたんけん博士」の認定状や日本学術振興会からの記念品を受け取って、2日間の真冬の遊びを締めくくりました。



雪の中で巻物と7つ道具を頼りに森の宝さがし
チームワークが決め手になる

子供たちは体と心で自然や友達との対話を楽しみ、ちょっぴり遅くなって家に帰りました。「初めて凍裂を見た」、「新しい友達ができた」、「おいしいアイスクリームが作れた」、「スノーモービルにいっぱい乗れた」、「大人の人と雪合戦をしたのは初めてで面白かった」、「また来年も来たい」などの感想が寄せられ、年末から準備作業に携わった職員の苦労も吹き飛びました。森のたんけん隊での経験を糧として、自然観察の面白さを学び、友達との交流が今後も広がっていくことを願いながら、今年の森のたんけん隊は終了しました。

なお、当センター森林圏ステーションのホームページにも掲載しています。（<http://forest.fsc.hokudai.ac.jp/yagai/tanken/tankentop.htm>）

（北方生物圏フィールド科学センター）

■同窓会との交流

恵迪寮同窓会「新年寮歌歌始めの会」



40年振りに再会しての寮歌高唱

1月28日（土）、昭和21（1946）年入寮のOBから現役寮生まで約90名の参加者が集い、恵迪寮同窓会「新年寮歌歌始めの会」が札幌市中央区にある「氷雪の門」で開催され、本学からは佐伯 浩総長、三上 隆理事・副学長が出席しました。

最初に、恵迪寮同窓会北海道支部総会が行われ、引き続き「新年寮歌歌始めの会」となり、同会の横山 清会長から年頭のご挨拶があり、次いで、佐伯総長が来賓を代表して挨拶を行いました。

次に、“恵迪寮魂”の拠り所「都ぞ弥生」を全員で斉唱し、横山会長、佐伯総長、三上理事・副学長他による鏡開きが行われ、今年迎える「都ぞ弥生」百年記念に向けての活動方針の説明があった後、昭和26（1951）年入寮生の中瀬篤信氏による乾杯の発声がありました。

暫しの懇談をはさんで、今年で百十数曲になる寮歌高唱が始まり、入寮年次別に登壇して、現役寮生と共に数々の寮歌が歌い継がれ、途中、寮歌の作

詞・作曲者が今回40数年ぶりに再会されたエピソードの紹介がありました。会場では、「都ぞ弥生」全文がプリントされた浴衣での参加者もあり、他の参加者と貴重な浴衣の由来について語り合う場面も見られました。

現応援団長による音頭で先輩後輩がそろって寮歌を高唱し、また、プログラムには予定されていなかったドイツ語訳と中国語訳に続く「スワヒリ語」の「都ぞ弥生」の高唱もありました。

寮歌高唱の最後には、参加者全員が会場いっぱいに大きな人の輪を作り、札幌農学校校歌「永遠の幸」を高唱し、その後「ストームの歌」を全員で高唱し、“コチャエ”の発声と共にステップを踏むシーンも見られました。

なお、約3時間半にも及んだ会では、会場のあちらこちらでお酒を酌み交わしながら談笑するOBと現役寮生の交流風景が見られるなど、最後に次回の再会を誓い合い、盛会のうちに終了しました。

（総務企画部広報課）



年頭の挨拶をする横山会長



鏡開きに参加する佐伯総長、三上理事・副学長



「ストームの歌」の輪

■ 諸会議の開催状況

役員会（平成24年1月12日）

協議事項・新・奨学金制度の創設について

- ・平成24年度年度計画の主な事項について
- ・社会科学実験研究センターの今後の措置について
- ・全学運用教員制度の見直しについて
- ・総長奨励金及び私費外国人留学生特待制度による留学生奨学金の学納金不徴収化について
- ・基礎クラス担任等業務に係る手当の導入について

報告事項・平成22年度における国立大学法人及び大学共同利用機関法人の業務の実績に係る評価の結果等についての意見について

- ・札幌キャンパスにおける交通動線の改善等に関する調査結果報告について
 - ・全学ICカード化に伴う事務局施設の入館について
 - ・北8条東宿舎等における入居可能者の拡大について
 - ・平成24年度予算（予定額）について
-

経営協議会（平成24年1月16日）

議 題・平成23年度北海道大学収入・支出予算の補正予算について

- ・平成23年度年度計画の変更について
- ・重要な財産を譲渡する計画について
- ・中期計画の変更について
- ・新・奨学金制度の創設について
- ・平成24年度年度計画の主な事項について
- ・基礎クラス担任等業務に係る手当の導入について

報告事項・「北大フロンティア基金」の寄付受入状況について

- ・平成22年度における国立大学法人及び大学共同利用機関法人の業務の実績に係る評価の結果等についての意見について
 - ・平成23年度政府補正予算（第3号）について
 - ・平成24年度予算（予定額）について
-

教育研究評議会（平成24年1月18日）

議 題・新・奨学金制度の創設について

- ・社会科学実験研究センターの今後の措置について
- ・総長奨励金及び私費外国人留学生特待制度による留学生奨学金の学納金不徴収化について

報告事項・Researcher IDの登録について

- ・全学運用教員の措置について
 - ・平成22年度における国立大学法人及び大学共同利用機関法人の業務の実績に係る評価の結果等についての意見について
 - ・大学間交流協定の新規締結について
 - ・平成24年度予算（予定額）について
-

役員会（平成24年1月23日）

議 案・平成23年度補正予算について

- ・平成23年度年度計画の変更について
- ・社会科学実験研究センターの今後の措置について
- ・新・奨学金制度の創設について
- ・全学運用教員制度の見直しについて
- ・総長奨励金及び私費外国人留学生特待制度による留学生奨学金の学納金不徴収化について
- ・重要な財産を譲渡する計画について
- ・中期計画の変更について
- ・文学研究科入学定員減に伴う教員人件費ポイントについて
- ・触媒化学研究センター部門の新設に伴う教員人件費ポイントについて
- ・ルサカオフィスの設置について

報告事項・会計検査院会計実地検査の実施について

※規程の制定、改廃については、「学内規程」欄に掲載しております。

■ 学内規程

国立大学法人北海道大学総長選考会議規程の一部を改正する規程

(平成24年1月16日海大達第1号)

総長選考会議の招集及び総長解任の申出について必要な事項を定めるため、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学における教員の任期に関する規程の一部を改正する規程

(平成24年2月1日海大達第2号)

任期を定めて採用する教員の職等から北海道大学病院の病院長付の助手を削ること、及び理学研究院の物理学部門の非線形物理学分野に採用する助教について、大学の教員等の任期に関する法律（平成9年法律第82号）第4条第1項第2号の規定に基づき任期を定めることに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学公印規程の一部を改正する規程

(平成24年2月1日海大達第3号)

国立大学法人北海道大学遠友学舎規程の一部を改正する規程

(平成24年2月1日海大達第5号)

本年2月1日付けで、遠友学舎の使用開始時間を改めること及び管理運営に関する事務を財務部資産運用管理課から学務部学生支援課へ移管することに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学寄附金規則の一部を改正する規則

(平成24年2月1日海大達第4号)

平成23年8月30日付けで「地方公共団体の財政の健全化に関する法律（平成19年法律第94号）」が一部改正され、地方公共団体から国等（国立大学法人等を含む。）への寄附については、原則禁止を改め、地方公共団体の自主的な判断に委ねることとされたが、引き続き国と地方の財政規律を維持するため、地方公共団体の自発的な意思決定に影響を及ぼさないよう、平成23年11月29日付けで「地方公共団体からの国等に対する寄附金等の取扱いについて」の閣議決定がなされ、国立大学法人においてもこの閣議決定に準ずるよう文部科学省から要請されたことに伴い、所要の改正を行ったものです。

■ お知らせ

過半数代表候補者の決定

札幌キャンパス事業場（病院を除く。）における過半数代表候補者は、以下のとおり決定いたしました。

(総務企画部人事課労務管理室)

職種・系区分		過半数代表候補者		
教員	文系	(文学研究科)	山本文彦	
	理学系	理学研究院	西田千鶴子	
		工学研究院・情報科学研究科	(工学研究院)	深澤達矢
		上記以外の理学系	(農学研究院)	東山寛
	医学系	(医学研究科)	内ヶ島基政	
事務系職員	附置研究所・全国共同利用施設系	(触媒化学研究センター)	小笠原正道	
		(学務部)	稲葉正思	
技術系職員		(附属図書館)	福盛田勉	
		(北方生物圏フィールド科学センター)	佐藤浩幸	
特任教員・契約・短時間勤務・嘱託職員		(工学研究院)	石川貞夫	
		(北方生物圏フィールド科学センター)	河合孝雄	

表敬訪問

国内

月 日	来 訪 者
24.1.19	全日本空輸株式会社 執行役員 札幌支店長 渡辺 俊隆 氏
24.2.1	公立はこだて未来大学 理事長 中島 秀之 氏



全日本空輸株式会社
執行役員 札幌支店長 渡辺 俊隆 氏 (中央右)



公立はこだて未来大学
理事長 中島 秀之 氏 (左から3人目)

(総務企画部広報課)

海外

月 日	来 訪 者	目 的
24.1.12	カンボジア教育青年スポーツ省 Phoeurng Sackona 次官及び カンボジア工科大学 Om Romny 学長	両国の交流に関する懇談
24.1.27	モンゴル国立大学 原子核研究所 Suren Davaa 所長	両大学の交流に関する懇談
24.1.27	東義大学校 (韓国) Tae-Kyung Yoon 副学長	両大学の交流に関する懇談
24.2.3	北海道大学韓国同窓会長 李 宇新 氏	同窓会に関する懇談



カンボジア教育青年スポーツ省
Phoeurng Sackona 次官 (中央左)



モンゴル国立大学 原子核研究所 Suren Davaa 所長
(右から4人目)



東義大学校 Tae-Kyung Yoon 副学長 (左から2人目)



北海道大学韓国同窓会長 李 宇新 氏 (左から2人目)

(総務企画部広報課, 国際本部国際連携課)

■人事

平成24年1月16日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【准教授】 大学院理学研究院准教授	原 田 潤	東京大学大学院総合文化研究科助教

平成24年1月31日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【助教】 (辞職)	小 林 隆 史 L I M I N Q I 兒 玉 裕 二 村 澤 尚 樹	大学院経済学研究科助教 大学院歯学研究科助教 低温科学研究所助教 電子科学研究所附属ナノテクノロジー研究センター助教
【技術職員】 (辞職)	内 村 花 菜 山 崎 久美子	北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師

平成24年2月1日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【教授】 大学院医学研究科教授 (転出) 東北大学原子分子材料科学高等研究機構教授	大 滝 純 司 西 浦 廉 政	東京医科大学教授 電子科学研究所教授
【准教授】 大学院工学研究院准教授 大学院工学研究院附属エネルギー・マテリアル融合領域研究センター准教授	佐 藤 太 裕 沖 中 憲 之	大学院工学研究院助教 大学院工学研究院附属エネルギー・マテリアル融合領域研究センター助教
【講師】 大学院医学研究科講師 北海道大学病院講師	保 田 晋 助 堀 田 哲 也	大学院医学研究科助教 北海道大学病院助教
【助教】 大学院理学研究院助教 大学院理学研究院助教 大学院工学研究院助教 大学院工学研究院助教 北海道大学病院助教 北海道大学病院助教	TASKER ELIZABETH JANE 前 田 理 ZIEMNICKA SYLWESTER MARTA 中 坂 佑 太 石 川 康 暢 木 田 敦 知	採用 採用 採用 採用 採用 北海道大学病院助手
【係長】 施設部環境配慮促進課係長	森 本 智 博	採用
【主任】 施設部環境配慮促進課主任	檜 木 大 輔	採用
【係員】 (出向復帰) 附属図書館管理課	嶺 野 智 康	帯広畜産大学教育研究協力部入試課
【技術職員】 北海道大学病院薬剤部薬剤師	杉 山 美 恵 子	採用

新任教授紹介

平成24年2月1日付



医学研究科教授に

おおたき じゅんじ
大滝 純司 氏

医学教育推進センター

生年月日

昭和33年11月7日

最終学歴

筑波大学医学専門学群卒業（昭和58年3月）

博士（医学）（北海道大学）

専門分野

総合診療，プライマリ・ケア，内科一般，家庭医療，
医学教育

編集メモ

●新田理事から「組織」をテーマに寄稿していただき、トップページに「役員便り」として掲載しました。

総長室・本部・機構という大学運営を担う組織の役割について、わかりやすく伝えてくださり、組織の設置を理解するきっかけとなったのではないのでしょうか。

今後も総長や各理事が「北大時報」のシリーズとして、北大の現状や取組みについて、ポイントを絞ってお伝えしていただきますので、次号もぜひご覧ください。

●本学の前期入学試験（2月25日）の前日、試験会場の下見に来た受験生を励まそうと、多くの学生でキャンパスが賑わいました。「道案内」という看板を胸に下げた学生さんと話す機会があり、“受験生から声をかけられることも多いです”と楽しそうに話す、寒さを感じさせない姿が印象的でした。



2006. 7. 2 大雪山赤岳

北の息吹 58 メアカンキンバイ (*Potentilla miyabei*)

高山に黄色い花は数あれど、本種のような赤みのない純粋な黄色の花は珍しい。もっと低いところに咲くオミナエシと共通する色合いである。キンバイの仲間には日本の山に多いが、花卉の間に隙間があるのも本種の特徴で、形の良い青白色を帯びた緑色の葉と相まってなかなかユニークな存在である。この風情のある高山植物は北海道にしか分布せず、北大の宮部金吾先生

由縁の種名というのも北大関係者には誇らしく感じられる。基準標本は雌阿寒岳で採取されたようだが、表大雪では普遍的に分布しており、最も手軽に見られるのは黒岳頂上から黒岳石室の間であろう。

前理事・副学長 岡田 尚武

北大時報 ② No.695 平成24年2月発行

北海道大学総務企画部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目
TEL: (011) 706-2610 / FAX: (011) 706-4870 / E-mail: kouhou@jimuhokudai.ac.jp
北大時報はインターネットでもご覧いただけます。http://www.hokudai.ac.jp/bureau/populi/